

フランクフルト研究所の人々

——カール・ウィットフォーゲル——

馬 場 明 男

I 序 説

1957年、カナダの歴史家ハーバート・ノーマン先生が、任地エジプトで自殺してから、丁度20年間経過した1977年に「思想」(634号)は、このノーマンのかずかずの学問的功績を明らかにするため、追悼記念号を発行した。日本で生れ、日本で育ったため、日本のことについては深い知識をもっていたノーマン先生を有名にしたのは、先生が優れたカナダの外交官であったからでなく、むしろ一人の歴史学者として近代日本に関して該博な知識の持ち主であったばかりか、近代日本について正当な評価を与え、豊富な資料とその鋭い歴史感覚によって「日本における近代国家」という労作を書いたことで、歴史学界に牢固たる地位を築いたからであった。このノーマンがエジプトで自殺したのは、その原因について明らかでなかっただけに色々と噂が流布されていたからであった。このことに関し名古屋大学の水田洋教授が昭和41年に光文社から発行した「マルクス主義入門」(カッパブックス)のなかで、ノーマンの自殺の原因として、アメリカ全土にマッカーシズムが吹き荒れたとき、アメリカの進歩的知識人は過激な実践家であるかどうかを立証させられたが、ノーマンも証言台に立たされた。そのときノーマンを証言し、彼を誹謗したといわれていたのはカール・ウィットフォーゲルであったため、このことが原因となって、ノーマン先生を自殺に追いやったというのであった。

昭和2年、カール・ウィットフォーゲルの中国に関する纏った最初の著述である「支那は目醒め行く」(白揚社)が邦訳され、第二次世界戦争を終了してから、ウィットフォーゲルが書いた「東洋的専制主義」(Oriental Despotism)が論争社から翻訳され、これが昭和36年出版されるまで、丁度30数年間に亘って、数多い中国に関する力作を書いていたが、これらの大部分は、わが国に邦訳され、当時の中国研究に多くの便宜を提供したものであった。

昭和10年前後、私の関係した大学の社会学科では、わが国に留学してきた沢山の中国留学生を受け入れ、日中戦争の勃発とともに両国の関係が破局的な様相を呈するまで、私は彼らの世話をしたものであった。この困難な指導に協力してくれたのは、当時中国の金融財政研究家としての権威者であった小林幾次郎博士とわが国の文化に関し該博な知識の持主であった桜井庄太郎博士(1970年明星大学教授として死去)であった。勿論、私は専門の社会学以外に戸田貞三先生の「社会調査」(時潮社版)をテキストとして実証的研究の方法論を教えたものであった。このころ私も中国研究に情熱を燃やしていたが、私の中国研究にオリエンテーションと方法論を与えてくれたものはカール・ウィットフォーゲルの著書であった。それだけに私はこのウィットフォーゲルにたいしては心からなる尊敬の念をいっていたのであった。

このウィットフォーゲルにたいする水田教授による批判にたいしては簡単に是認することは

できなかった。イギリス思想史についての水田洋教授の該博な知識、透徹した分析力そして誤りない批判精神にたいし、いつも敬意を払っている私は、とくに最近の中央公論社の世界の名著の一冊として出版されたエドモンド・パークの「フランス革命に関する省察」の邦訳と、それに寄せた懇切なパーク論は近來の名論ということができる。最近、私も社会学史研究、例えばトム・ボットモアとニスベット共編による大著「社会学分析の歴史」を中心に1970年代後半の社会学史研究の力作を紹介するため、社会学史論を執筆したが、この著作の第三章に載っている「保守主義」は極めて興味をそそるものであるが、これらの論文を通じ近代社会の生成期にあってパークの演じた思想的役割を強く認識しているが、そのことと関連し、パークの研究に多少関心を払っている。とくに印象深く読んだものはアイザーク・クラムニックの「エドモンドパークの激怒」(*The Rage of Edmund Burke*, 1977)であった。この著述と水田教授のパーク論を比較してみても、水田教授のパーク論は決して劣るものではないことを知ったものであった。それだけに水田教授のウィットフォークル批判を反論する自信はないばかりか、反駁するに必要な正確の資料がないので、最近まで不問にしていたのであった。

ノーマンの追悼号(「思想」1977年4月号)の諸論文はどれも有益なものであるが、そのうちのヒラリー・コンロイの「政治の犠牲者にして社会史家ノーマン」という一文を読んだ限りではウィットフォークルの証言について誤解があったように書かれてあることを知った。勿論このコンロイの小論だけでウィットフォークルの冤罪が誤りだということはできない。丁度1978年ウィットフォークルの研究家ウルメンの「社会の科学」(*Ulmen, the Science of Society, Toward an Understanding of the Life and*

Work of Karl August Wittfogel)も、その中でウィットフォークルのノーマン教授にたいして行った証言をとりあげていた。少くともウルメンの本書から、ウィットフォークルの証言問題は誤解であって、風評にもとづくものとしていたようだ(注)。

(注) 1957年4月10日の毎日新聞に桑原武夫博士の書いたノーマン博士の思い出によると、ノーマンとウィットフォークルが親しかったことを窺うようなことが書いてあった(桑原武夫氏の全集第五巻参照)。

戦後30年間私は多くの学生を容れていた大学に関係を続けていたため、若いころ多くの学恩と示唆をうけたウィットフォークルのその後の消息については全く知る機会がなかったし、中国関係の論文を読むこともなかった。しかし、最近日中両国の交流の再開それと同時にウルメン教授によるウィットフォークル博士の記念論文集(*Society and History: Essays in Honor of K. A. Wittfogel* edited by G. L. Ulmen)によって、ウィットフォークル博士が84歳の高齢で、尚かくしゃくとして、アメリカにあって活躍されておられることを知り、ウィットフォークルの中国研究にたいし新しい興味を起したものであった。

私がウィットフォークル研究を意図したもう一つの動機は、マルクスの「アジアの生産様式論」が最近再燃したことである。しかもこの研究にたいして、内外の社会学者が積極的にこの問題の討論に参加したことを知り、このことが私のウィットフォークル研究を強く刺激したことであった。

戦前、私が中国の研究に私のすべてをかけていたとき、その研究の一つに「中国の高利貸資本の研究」があった。これは帝国主義列強が中国に侵略したとき、ある程度の資本の投資があって、中国の生産に役立ったが、しかし中国に導入された資本の殆んどのが中国の生産を

促進させるため役立ったものでなくその大部分は高利貸資本として転化されて、中国の大衆の奪取手段となって、中国大衆の貧困に拍車をかけられたといわれていた。かつてわが国にも大正のころより昭和のころまで、農村問題が活気を見せていたが、その重要な社会問題として指摘できるものの一つに同じように高利貸資本すなわち農民負債があった。当時、佐野学や猪俣津南雄の農村問題研究はとくにこの方面をとりあげていただけに示唆の多いものであった。同じような中国でも拡大化し、こうしたことが中国の近代化を阻止したものであった。勿論カーンの「列強の支那にたいする投資」のような名著もあったが、实际的にいうと事物の本質を見ると、中国は複雑な要因があって、これと結びついた外国資本は高利貸資本となって大衆の収奪に役立ったのであった。私は中国研究に筆を執っていたとき、最も多くの興味をもって小論を書いたものは、こうした問題意識を前提のもとに試みた中国高利貸資本の研究であった。

こうした問題を研究した際に生まれたものが、最近国書刊行会から復刻本として出版した「中国問題文献辞典」（昭和16年）と「中国政治経済年表」（昭和18年）であった。とくに前著のなかで、当時私もアジア的生産様式論に特別の関心を払って種々な文献を蒐集し、それらをもとに該問題を相当深く研究したものであった。私が利用したものに尾崎秀実、秋沢修二、清水盛光、藤枝丈夫、森谷克己、佐久達雄、早川二郎、橘樸、錢亦石、コブアレツ・ライハルト、ウィットフォークルなどの著書があった。

II カール・ウィットフォークルの小伝

戦前から中国の研究家として国際的に知られたカール・ウィットフォークル博士は、19世紀が終ろうとする1896年ドイツのハノーヴァの片田舎フォルスターズで生れた。この町の小学校

教師であった父親が職を離れたため、此处から Lüneburg に移った。此处で彼はジムナジウムに行くようになった。ドイツの若者がすべてそうであるように、哲人ニイチェから感化を受けた。ウィットフォークルはライプツヒ大学に入学し、此处でウイルヘルム・ヴントとカール・ランブレヒトに学んだ。ライプツヒで有名な社会主義的新闻である *Leipziger Volkszeitung* を読んだが、彼はこの時期には社会主義思想を受け容れなかった。1915年ミュンヘンに移った。此处で彼が勉強したものは美学や詩学であった。さらにウィットフォークルはライプツヒからベルリン大学に移った。当時ベルリンにはヘーゲル全集を編集したゲオルグ・ランソンがいた。ヨーロッパに第一次大戦が始まった。1916年父親の死とともに、ウィットフォークルは更にローストック大学に移って、此处で学業を続けることになった。この時期に、彼は経済史家のリチャード・エーレンブル（1857—1901）から社会科学を学ぶことを教えられた。

ヨーロッパ大戦は1917年終結した。この戦争はロシア帝国に革命をもたらしした。ドイツにも激しい内乱があった。ドイツの社会民主党（SPD）は分裂し、独立社会民主党が新しく成立した。ウィットフォークルは1918年この政党に加わった。社会民主党のうち極左であったローザ・ルクセンブルグやカール・リープクネヒトやスバルタカスに属した人々は殺されるに至った。

ウィットフォークルはベルリン大学で学業を継続していたとき Edward Meyer, Ulrich Wilken の教えをうけた。更に社会学の講義を聴いたが、ベルリン大学ではアルフレッド・フイアカントが教鞭を執っていたので、彼の授業にも出席した。

1919年第一回の社会主義学生会議が開かれたとき、ウィットフォークルもこの会合に参加し

た。この会合が、スイスで催されたとき、ドイツの代表の一人としてウイットフォークゲルも参加した。このとき、ウイットフォークゲルはドイツの著名なマルクス主義者であるカール・コルシュと知り合った。

コルシュは1923年ごろ「マルクス主義と哲学」という著書を書いたが、これは邦訳され、わが国にも大きな影響を与えたものであった。わが国が震災を被ったころドイツに留学していた多くの留学生のうち、このコルシュの家に出入りして思想的感化を蒙ったようであった。この間の消息については水田洋教授の「マルクス主義入門」(光文社)が伝えているので、此处では触れないことにしたい。

コルシュの書いた「マルクス主義と哲学」はカウツキーらに批判されたばかりか、ルカーチの「歴史と階級意識」と同じように主観主義的偏向として、鋭く批判されるところとなった。ドイツの情勢の変化とともに、コルシュはデンマークに亡命したが、此处で書きつづけていた「カール・マルクス」も1972年に邦訳された。

更にウイットフォークゲルは中国研究家であるエドワード・エルケスを知ってから、中国研究を古典的な興味から中国の実際問題に研究を向けるようになった。

1922年、ライプツヒヒで第二回の社会主義学生会議が開催されたとき、フランツ・ボルケノウ、シュレジンジャー、フォーガラシなどを知る機会があった。この年にウイットフォークゲルの「ブルジョア社会の科学」が脱稿されていた。これは「マルクス科学概論」のタイトルで邦訳されている。

ウイットフォークゲルの社会科学には、マルクスの影響もさることながら、マックス・ウェーバーの思想にも負うところが多かった。少くともウイットフォークゲルはヨーロッパの都市とアジアの都市の比較研究をするにあたって、ウェー

バーの比較研究方法によるものが多かった。1922年、ウイットフォークゲルは旅行中にソ連のマルクス主義の父といわれているプレハーノフの「マルクス主義の根本問題」を読んで、深い感銘をうけたようであった。

ロシアにおけるマルクス主義の先駆的役割を演じたプレハーノフは1918年フィンランドのサナトリウムで死去した。スターリン時代のソ連ではプレハーノフは低く評価されたが、スターリン死後のソ連ではプレハーノフは再び高く評価されるようになった。1963年に出版されたパロンの「プレハーノフ」(Samuel H. Baron, Plehanof: the Father of Russian Marxism)は、プレハーノフの思想的発展を辿りながら、19世紀20世紀にかけての変転極まりないロシアの複雑な社会的政治的諸問題に焦点を合わせ、その時代のいくつかの側面を克明に描写した。プレハーノフを論じたパロンの著述は、近来まれにみる労作であろう。わが国にも昭和の初期より、この「マルクス主義の根本問題」が邦訳され、わが国のマルクス主義思想の形成の上に役立ったものであろう。またプレハーノフの史的一元論などは社会学を学ぶものに有効な参考文献となっている。このプレハーノフを知ったウイットフォークゲルはプレハーノフから多くの思想を受容し、自己の理論体系をつくりあげたというべきであろう。

第一次ヨーロッパ大戦後のドイツの政治経済の諸情勢、急激な変化を示した1922年ごろのドイツマルクス主義思想の発展は、一つの重要な時期を示していた。このころドイツではマルクス主義の研究熱が高まっていたが、当時のドイツで名声が高かった思想家はカール・コルシュとゲオルク・ルカーチであった。ルカーチの「歴史と階級意識」は、若きルカーチの理論活動の集大成である。これは以前からの著作の体系化以上のものである。すなわち、その鋭い概

念構成と歴史的素材の豊かさにおいて、これは彼の思想的発展の新段階をさし示している。この二人のドイツのマルクス主義者は所謂「西欧マルクス主義者」というレッテルをはられ、ソヴェート・マルクス主義者たちから、異端視扱いをうけたものであった。

ウィットフォークゲルはコルシュとも親交を結んだように、ルカーチとも親しくなったが、しかしルカーチとウィットフォークゲルの二人の思想的内容にはいちじるしい相違があった。これを一言でいうと、社会科学者であったウィットフォークゲルはルカーチにとってはあまりに実証主義的であった。これとは反対に、ルカーチはウィットフォークゲルにとってはあまりに歴史的であった。1924年、ウィットフォークゲルは「ブルジョア科学の歴史」(Geschichte der Bürgerlichen Gesellschaft, 1924)を著わした。本書は度々邦訳されたが、いつも出版されるたびに発禁処分をうけたが、昭和10年新島繁氏の訳「市民社会史」(上・下)という題名で叢文閣から出版された。市民社会史の研究にはこれまでアダム・ファグソンの文献が知られていたが、新島訳は貴重な文献として広く読まれたものであった。この新訳の下巻にウィットフォークゲルと親交のあった平野義太郎博士による長文の跋文が掲載されていた。昭和2年以来「支那は目醒め行く」という中国関係の論文によって、わが国に知られるようになったウィットフォークゲル博士が、このころドイツの政治権力を握ったナチに捕えられラーゲルに禁足されていたのであったことを、本書によって教えられたものであった。平野博士の跋の一部をここに引用しよう。

「原著者ウィットフォークゲルは、われわれの古い友人である。大戦後(第一次大戦)プロレタリアートの発展と共に不断に思想的に学問的に成長せる過去にひきつづいて労作され

たかれの幾多の労作のほとんどすべてが邦訳されて、古くから日本の読者に親しまれて来た。いまラーゲルに押し込められていると伝えられる原著者に、この邦訳書をみせるよすがもないであろう。私は訳者と共に、一日も早くその日の来ることを心より待望する」(「市民社会史」跋)

第一次大戦後、ドイツの帝政支配はもろくも崩壊したが、その後ドイツは苦難の道を経て、一応共和体制が生れた。このドイツの国内の復興とともに経済的繁栄を呈したフランクフルト・アム・マインは政治的にも中心地となった。1922年にこのフランクフルトに社会研究所が創立された(富田富士雄教授古稀記念論文集「現代社会と人間の課題」拙稿「カール・ウィットフォークゲル その回想と軌跡」参照)。

1925年ごろの中国は、阿片戦争以来、列強によって侵略をうけ、いわゆる半封建的半植民地的国家として、かろうじて余命を保っていたが、中国の大衆はようやく資本主義の搾取から目醒めつつあった。この当時の中国の情勢を示すと1925年には中国の大都市にはストライキが引続いておこっていた。最初上海にあった日本の紡績工場に、次いで青島にあった日本の紡績工場に、更に天津の裕大紡績工場に大がかりの罷業が発生した。ロシアの指導者レーニンは、中国の大衆運動が世界革命運動の要因となりつつあることを強調していた(拙著「中国政治経済年表」国書刊行会版参照)。

フランクフルト研究所の初代所長ゲルラッハが36歳の若さで死んだため、代って二代目の所長となったのはオーストリア、マルクス主義の父と称せられていたカール・グリュンベルグであった。

この研究所を設立したのはフェリックス・ワイルという人であった。この人の父親ヘルマン・ワイルは息子の計画に心から賛成し、年額

12万マルクの経費を研究所の運営費にあてた。この研究所は最初フェリックス・ワイル研究所と呼んだらという意見もあったが、結局、社会研究所 (Institut für Sozialforschung) と称されるようになった。この研究所の創立者ワイルとウィットフォージェルとは昵懇の間柄であったが、ウィットフォージェルは早くから入所を要請されたが、実際に参加したのは、創立後8年が経過してからであった。

フランクフルト社会研究所の所長となったカール・グリュンベルクの指導のもとで、ウィットフォージェルは博士論文の執筆につとめたのであった。彼の論文のテーマは「中国の経済と社会＝アジア的な一大農業社会にたいする科学的分析の企画、とくにその生産諸力、生産の流通過程」であって、この論文はフランクフルト研究所から出版することとなった。この著述の序言に書いてあるように、この力作が生れたのはフランクフルト社会研究所の絶大な尽力であったことを強調していた。しかも「この科学的労作にたいし、同研究所が与えられた多年に亘る促進と英断にたいし、感謝を表すことが私の義務と考える」といって、ウィットフォージェルは喜びを示していた。厳密にいうと、この力作は、マルクスの研究方法とウェーバーのそれとを結合したものである。このことについてウルメンもマルクスとウェーバーの遺産を結びつけたことと述べていた (*Ulmen, the Science of Society*, p. 104)。研究所が正式に発表した著述は、ウィットフォージェルのものばかりか、高い水準の理論的なものとしてヘンリク・グロスマンの「資本主義体制における集積と崩壊の法則」 (*Henrik Grossman's the Law of Accumulation and Collapse in the Capitalist System*) とフリードリッヒ・ポロックの「ソ連邦における経済的計画における諸経験」 (*Friedrich Pollocks Experiments in Economic planning in*

the Soviet Union 1917—1927) なども相次いで出版された。

ウィットフォージェルが中国関係の研究に専念しているころ、ナチの勢力はいよいよもりあがり、ドイツの進歩的知識人は相ついでドイツから海外に逃亡することを余儀なくされた。これら知識人の一人であるカール・ヤスパースの弟子ハンナ・アレントはアメリカに亡命し、此処で文筆活動に従事したが、その作品のなかに「暗い時代の人々」 (*H. Arendt, Men in Dark Times*) がある。この言葉はブレヒトの有名な詩「あとから生まれるひとびと」から借用したのであるが、そこには混乱と飢餓、自殺と虐殺、不正にたいする暴動と「悪のみがあって暴動の存在しないこと」への絶望——（「暗い時代の人々」はしがき）更にスチュアート・ヒューズの「*The Sea Change—1930—1965*年の社会思想の移動」もドイツの知識人のアメリカへの移動を書いたものであった。とくにヒューズはこの著書において、社会研究所の後期に属するすぐれた所員であるホルクハイマーとアドルノに関して大衆社会の批判というテーマで書いていた。1930年代ドイツからアメリカに渡った人々のうちで、マルクーゼやフロムも、ウィットフォージェルも同じ運命を辿ったものであった（マルクーゼ、フロムに関しては1981年の明星大学の人文学部紀要所載の拙稿参照のこと）。ウィットフォージェルは、スイスに亡命したが、再びドイツにもどったとき政治的活動を行ったという理由で逮捕されたが、夫人とイギリスの経済史家トウネイ教授の尽力で、ラーゲルから釈放されたが、1934年9月アメリカに亡命、爾来84歳の現在も元気で活躍しておられる。

ウィットフォージェルが、ルカーチ、コルシュ、ブレヒト等に仕掛けて、イギリスに行ったのは1934年の1月2日のことであった。ロンドンではルプレ・ハウスに関係をもつことができた

し、大英博物館の読書室で閲覧する便宜を与えられた。彼はドイツからイギリスに逃れるに際しても中国や日本に関する資料はドイツから持ち出すことが許されたが、しかし大量の研究資料は、戦時中空襲のため悉く焼失してしまったのであった (*G. L. Ulmen, the Science of Society, p. 171* 参照)。

Ⅲ 近代におけるヨーロッパ知識人の中国観

昭和2年にウィットフォークの中国に関する最初の著書である「支那は目醒め行く」から、第二次世界大戦の激化した時点まで、彼の主だった著述でわが国に翻訳された著作を紹介すると次の通りである。

昭和2年	支那は目醒め行く	白揚社
昭和4年	孫逸仙と支那革命	永田書店
昭和9年	支那の経済と社会(上・下)	
		中央公論社
昭和10年	支那経済史研究	叢文閣
昭和14年	支那社会の科学的研究	岩波書店

これらの文献以外にもあったが当時私の蒐集した中国関係の文献はすべて戦災で烏有に帰しているため、残念ながらここに挙げることはできない(拙著「中国問題文献辞典」国書刊行会参照)。

ウィットフォークの浩瀚な著述のうち戦後漸く入手できたのは「支那の経済と社会」(中央公論社)と、戦後中国問題が再び盛況となってきたころ、ウィットフォークが戦後書いた力作である「東洋の専制主義」(*Oicentl Despotism, 1957*)の邦訳書(論争社)であった。少くともこの二つの著書はウィットフォークと中国社会の研究にも不可欠な文献として無視できないものである。

最近、アジアとは何かという問題が、とにもりあがってきたが、とくにアジアが列強諸国家の植民地となり、資本主義的収奪の対象とな

っていた19世紀に、この問題が論ぜられるようになってきていた。植民地化されたアジアに関し、人類学、比較社会学、比較宗教学、民族学、文化人類学もしくは地理学などが盛況を帯びてきたのは、列強諸国によるアジア・アフリカにたいする研究が、この国の植民政策の発達と密接な関係があるというべきであろう。例えば G・ルクレールの「人類学と植民地主義」(*Anthropologie et Colonization*)は、インドに関する研究であったにせよ、この著述の中で展開された理論は、中国に関しても妥当できるものといえる。ルクレールは人類学が植民地主義から生れた学問であることを強調していたのであった。しかしながら、今日では多少とも事情は異なったものとして発展したというべきであろう。

ヨーロッパ人がインドやシナなど、彼等とくらべ文化的に著しく相違した人間が住んでいる世界に眼を向けたのは、相当古い時期であった。とくに中国について関心を払ったのはアリストテレスであったといわれている。しかし具体的には発見の世紀といわれている16世紀ごろから東方の見聞録が書かれるようになった。17世紀になると、オリエントに関する詳細な旅行記が一種のブームとして出版されたのであった。例えば、その後マルクスが引合いに出しているフランソア・ペルニエの旅行記であった。彼はコルベールの政策にたいし東方の事情から意見を具申したといわれている。更に *Pierre Bergeron* の著書を通じ東洋の専制主義の概念がヨーロッパにもたらされたとされている。

東洋の専制主義の概念が、ヨーロッパに伝わり、ヨーロッパ諸国でとくに使用されたのはフランスであった。フランスで絶対主義的専制が支配したのはフランスのルイ14世の時代であった。マザランとルイ14世の政治を適当に表現するために専制政治というギリシャ語が使用されたのはこの時期であった。このデスポティズム

という言葉が、実際に政治的論文に使用されるようになったのは1703年のピエール・ペイルの *Réponse aux Questions d'un Provincial* の中であった (Marian Sawer, *Marxism and the Question of the Asiatic Mode*, p. 13) この専制主義という名称に適した君主といわれているルイ14世は1638年9月5日サン・ジェルマン離宮に生誕し、1643年5月14日国王となり、1651年に成人式を挙げた。1661年宰相であったマザランが世に去ってから、国政を手におさめた。このルイ14世がフランス王国の絶対主義的君主となるためには所謂リシュリユーとマザラン時代について知る必要がある。この二人のかずかずについては1978年に出版された名著であるリチャード・ボンネイの「リシュリユーとマザラン下のフランスの政治的变化」(Richard Bonney, *Political Change in France Under Richelieu and Mazaran 1624—1666*) が、もっとも該博な研究論文というべきであろう。この書物の目的は、1624年以後リシュリユーにより導入され、マザランまで継続したフランスの政治的变化について精密な歴史的事実を述べることにあるといっているように、この二人の宰相による時期こそフランスの絶対主義の発展における決定的な変貌過程であることを論じたものである。ヨーロッパに長く続いた宗教戦争によって、国内の荒廃が極端であったものを復興しなくてはならなかったし、そのためリシュリユーは重商政策を強化し、フランスの富を増大させ、フランスに栄光をもたらすことが必要であった。このリシュリユーの死後、枢機卿であったマザランがフランスの宰相に就任した。彼はリシュリユーの政策を継承し、絶対主義的政策を一層強化したのであった。彼の宰相時代にはフロンドの乱などがあったが、この事件は王制を強化する契機となった。経済が豊かになるにつれ、フランスの文化は繁栄そのものとなって、所謂

バロック時代を生んだ。同時にこの17世紀のフランスは近代思想史にあって、もっとも重要な思想家であるデカルト、パスカルを生んだのであった。この時期について「絶対主義の時代、1648—1775年」(Maurice Ashley, *the Age of Absolutism*, 1974) を著わしたモーリス・アシュレイは、17世紀における西欧科学と哲学という項目のなかで、デカルトの教儀は、一般的には承認されなかったが、西欧世界を支配していることを述べていた。しかしルイ14世は、当時の宗教儀式で、デカルトの遺骸を埋ることを拒否したといわれていた。17世紀の後半は、率直にいうと政治科学よりも遙かに興味あることは科学的知識が向上したことであった。

17世紀フランスの偉大な宰相であったマザランの死とともに、ルイ14世の直接的な支配が開始された。彼れは絶対的君主として君臨したのであった。「ルイ14世」を書いたユーベル・メチヴィエは、ルイ14世を評して「ルイ14世は純粋な形で君主そのもの、一種の君主的全体主義つまり他の主権者にとっては1つの理想形態であった支配と統治の仕方といってもよいものを具現した」(白水社、クセジュ文庫8頁参照)と書いていた。率直にいうとルイ14世には毀誉褒貶もあった。ある人はルイ14世の世紀は、外観ははなやかであるが、中身は貧乏の世紀だといっている人もあった。その後フランスの合理主義者であるヴォルテールなど、このルイ14世の時代を描写し「ルイ14世を讃仰し、思想学問は別としても、芸術の保護奨励において、何人にもまさり、人間の洗練教養開明に貢献したる旨を強調し、人道(ヒューマニティー)に寄与せる点では最上の君主だ」といっている(千代田謙「啓蒙史学の研究」第五章、ルイ14世時代とヴォルテール参照)14世があまりにもすぐれた君主であったため、彼を継承した15世、16世時代になってあまりに暗愚であったため、フランス革命を

招来したというべきであろう。

フランスにおける絶対主義支配を攻撃する武器として東洋的専制主義という言葉を使用した学者は、疑もなくモンテスキューであった(注)。

(注) 平野先生もウィットフォークの「東洋的社会の理論」の復刻版のあとがきに次のように書いていた。『まず、モンテスキューの「法の精神」(1748)つづいてアダム・スミスの「富国論」(1776)アジア研究においても古典学派を形成するが「アジア的専制主義」を、その開明的なヨーロッパの絶対主義的形態のために擁護するフィジオクラットのフランソワ・ケネーの「中国の専制主義」など、こんな異色のものもあるとはいえ、総じて東洋的社会の停滞性を打ち破る。その時代のヨーロッパの啓蒙精神とともに、植民地支配への構図もそのなかにほのかにみえる』といって19世紀になってマルクスの見解などをつけ加えていた。

啓蒙主義の先駆者であるモンテスキューについての研究は、従来可成り豊富な研究成果が積み重ねられていた。とくにモンテスキューの社会学的価値を充分認めているデュルケームの「モンテスキューとルソー」或は最近ではレーモン・アロンの「社会思想の主流」で取扱ったモンテスキュー研究など示唆に豊んだものというべきであろう。また社会学史的研究としてザイトリンが「イデオロギーと社会学理論の発達」でとりあげているモンテスキューも、近代社会の先駆的役割を演じたモンテスキューを一層克明に示したものであろう。とくにザイトリンがモンテスキューを称して自らを中世的遺産から解放し、社会的事実を正確に捉えようとする態度を高く評価していた(Zeitlin, *Ideology and Development of Social Theory*, p. 12)。

モンテスキューが知識史のなかにあって卓越した地位をしめしているのは、彼の著述である「法の精神」が、学問の世界にあって科学的研究とくに比較方法を明らかにしたことである。そればかりか「法の精神」にふくまれた自由主義とくに自由を実現するための手段を探究していたことであつた(B. グレトウイゼン著井上堯裕

訳「フランス革命の哲学」参照)。

彼を稀有の歴史家として高く評価されている「ローマ盛衰論」によって示しているように、彼はフランスを離れ、1720年から1731年にかけてオーストリア、ハンガリー、イタリ、イギリスというように遠い土地を歩いて各地を見学したことが彼にとって貴重な体験となつたし、この旅行は彼の実証的研究に役立つ資料となつたものというべきであろう。勿論、彼は東洋に旅行することはなかったにしろ、近代フランスの実情を心ゆくまで批判するためペルシャ人をしてフランスの社会を忌憚なく批判を企てたものが「ペルシャ人の手紙」であつた。これは彼の名声をいやが上にも高からしめたものであつた。この著述はまたたく間に売りつくされた。というのはこの著述を通じ、東洋的視点から、フランスの生活、フランスの制度を観察するという方法を使用したものであつた(ポットモア・ニスベット共編「社会学的分析の歴史」第一章18世紀の社会学的理論参照)。これらの著述から見ると、モンテスキューはフランスの絶対主義体制の批判の武器として東洋的専制主義の概念を使用したものというべきであろう。ソ連マルクス主義の父プレハーノフが指適したように、モンテスキューの社会理論、とくに自然的条件を重要視した思想一たとえば政治体制に重要な影響を有していると観ている地理的因子に力点を置いた概念などは、その後の思想家に多くの感化を及ぼしたというべきであろう。アジアの地理的条件とアジアの専制主義の関係についてのモンテスキューの見解は、とくにドイツの思想家に影響を与えたといわれている。更にイギリスのヘンリー・トマス・バククルに直接影響を及ぼしたといわれている。バククルによると、アジアの政治的運命は、土地、気候、食料に関しての自然の豊富さが、人口過剰をまねき、これが奴隷制もしくは専制主義の事実を決定すると論じて

いた。

モンテスキューの東洋的専制主義に関する概念を継承したのは、ヘルペチウスであった。しかし彼はモンテスキューの地理的決定論には賛成しなかった。更に東洋的専制主義の言葉を使用したのはニコラス・ブーランジュであった。ブーランジュは、理性の進歩に力点を置いた自然法を支持したものであった。

17世紀から18世紀になって、中国に派遣されたジェスイットの宣教師たちは、東洋的専制主義のことに関し多くの報告を述べていた。こうした事情については東洋史家の石田幹之助博士が昭和17年ごろの著書「欧米における支那研究」(創元社)のなかの最初の論文で具体的に歴史的展開を描写していた。とくに教授は17世紀の状況について次のように述べていた「宣教師の支那研究は17世紀の末に入って更に躍進を見るに至った。これは主としてフランス宣教師の努力の結果であったが、この背景としてはこの国の対東亜政策の積極化を挙げなければならぬ。当時のフランスの名宰相ユルベールはルイ14世を動かして大いに勢力を伸ばさんとし、その基礎の一部として……」(前掲書14頁参照)

17世紀に使用されていた、この専制主義の概念は18世紀になってフランスの政治的局面に積極的に使用されるようになった。とくに1735年のPère Jean Baptiste du HaldeによるDescription géographique historique, chronologique, politique et physique L'Empire de la Chine et de la Tartarie chinoiseは著名であり、これはイギリス、ドイツ、ロシア語と翻訳された、ヨーロッパ各地で周知のものになった(Marian Sawyer, *Marxism and the Question of the Asiatic Mode of Production*, p. 19)。

フランスの中国研究は、ヴォルテールと所謂哲学者たちによって最高潮に達したといわれている。この伝統は重農主義者たちによって継承

され、中国をフランスの積極的なモデルとして考えたのであった。この中国に関する研究はフランスばかりか、ドイツでも盛況を帯びていた。とくにヘーゲルは、モンテスキューの方法について深い関心を払っていた。一般的にいつて19世紀の政治的ロマン主義の政治的自由主義は、その思想の根拠をアジア的社会にたいし、彼らが抱いていたイメージから由来したものとされていた。

東洋的専制主義を経済的体制として分析しようとしたのは、イギリスの政治経済学者たちであった。東洋的専制主義のモデルを純然たる経済的に説明を示したのは「富国論」を書いたアダム・スミスであった。スミスはこの著述のなかで、アジアの諸地域をヨーロッパとはいちじるしく違った特殊性、例えば埃及や印度では灌漑をふくむところの国家による公的事業などに触れていた。更にJ.S.ミルは、アジア社会の基本的な特質を鋭く観察していた。更にアジア社会を一層体系的に分析したのは同じ時代のリチャード・ジョーンズであった。このジョーンズの東洋的専制主義の見解がマルクスの思想に大きな感化を与えたといわれている。就中、灌漑の問題をアジア的専制主義の鍵だとみなしているジョーンズの見解は、マルクスに、また後半ウィットフォードにも影響を与えていた(Marian Sawyer, *Marxism and the Question of the Asiatic Mode of Production*, p. 39) とくにこの水の問題がアジアの農業社会を理解するための重要なキイ概念であることはウィットフォードの中国社会を理解する根本の問題である。この水の問題はウィットフォードの著書には重要な役割を示しているばかりか、中国の学者でも同じような立場に接近した者も多い。例えば中国の基本経済と灌漑を書いた冀朝鼎もその代表的論者の一人である(Chiao-Ting chi, *Key Economic Area in Chinese History*)。とくに

本書にたいしウィットフォーク博士は懇切な跋文を書き、この力作が中国の経済的・社会的・政治的發展の最も重要な特徴を、科学的に分析しようとする大胆な試みとして、心から賛成しているようである。そればかりか、この研究は中国の過去及び現在を直に理解するためには、この上もなく重要な貢献であるといつて、冀博士の理論を全面的に支持していたようである。この水の問題に関し、ウルメン教授もウィットフォークとトインビー教授の見解を比較しながら、前者の方が一層経験的資料に富んでいることを述べていた (*G. L. Ulmen, the Science of Society, p. 313*)。

IV マルクスのアジア観

マルクスとエンゲルスが非欧羅巴社会に興味を抱くようになったのは、1853年以後であった。ウィットフォークは彼の著述「東洋の専制主義」(*Oriental Despotism*)のなかで、このことに関連して次のように述べていた。「マルクスがアジア的観念の熱烈な支持者として登場したのは、かれがロンドンで古典学派経済学の研究を再現してからのことであった」(ウィットフォーク、前掲書(邦訳)448頁参照)。マルクスによると、列強資本主義のアジア諸国への侵入はかつては強大な専制主義的国家であったインドと中国を根底から顛覆してしまったのであった。ことに中国社会は強力な軍隊の力によらなくても、安価な商品が堅牢な万里の長城をうちこわしたといっていたマルクスの言葉は、若いときから今日に至るまで私の脳裡に焼きついていた言葉であった。近代はある意味で1789年のフランス革命によって開始された。「ヘーゲルとフランス革命」を書いたヨアヒム・リッターの著述によると、フランス革命は、すべてがそこに基礎を持つことになっていたのである。このフランス革命を出発点としてヨーロッパの

至るところに革命運動が生じた。個々の出来事をここに詳細に書くことはできないが、ヨーロッパ各地に波及した大革命は血なまぐさい経過を辿りながら、大体のところ終止符をうったのは1848年であった。それだけにこの1848年という時期はヨーロッパの曲り角を画したといわれている(良知力編「共同研究—1848年革命」ならびにジャン・カスー著野沢協監訳「1848年—2月革命の精神史」参照)。この革命運動の敗北後、マルクスはエンゲルスと共にロンドンに亡命をよぎなくされた。彼にとってロンドンの生活は短いものと思われていたが、色々な事情から、1883年3月14日最後の息を引きとるまで、ロンドンで過ごしたのであった。

マルクスが大陸からロンドンに移って、此処で死ぬまでの間、彼は波瀾^{うねり}な^{うねり}う^{うねり}う^{うねり}の^{うねり}実践生活を重ねたものであった。しかしある意味ではロンドンでは小康状態であったとしても、決して暖衣飽食の生活ではなかった。ときには自分の着ていた上衣を質屋に持参したほどの貧乏のどん底をなめたほどであった。

マルクスの生活の糧は、アメリカの大新聞「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」に寄稿し、其処から原稿料が来るのが収入源であった。R. J. ロングのマルクス伝によると、マルクスはアメリカの新聞に原稿を送る必要から、国際問題を論じなければならなかった。そのため自己の研究分野を拡大することをよぎなくしたのであった。イギリスという島国でのマルクスの生活が、個人的にも家庭的にも悲劇であったにせよ、それは彼の人格をより完全に開花させ、十二分に発揮させ、彼の主著「資本論」に十分な学的価値をあたえることとなった。

マルクスがヨーロッパ大陸からロンドンに亡命してからの彼の生活を調べるため、私はロングの「マルクス伝」(大月書店)、フランツ・メーリングの「マルクス伝」(大月書店の国民文

庫), さらにパーリンの「カール・マルクスの生涯と環境」(中央公論社)などを読んだのであった。その結果、マルクスは新聞に寄稿するためにイギリスの外交政策、植民政策もしくはイギリスの政治などを克明にしらべたのであった。ロンドンに亡命してからの彼は本を買うなどの金銭的余裕は全くなかったので時間の許すかぎり、大英博物館の図書館に行って此処の本を借りて読んだのであった。この図書館で読んだものは、ミルの「経済学原理」、スミスの「富国論」、ジョーンズの「Introductory Lecture on Political Economy」、ベルニエの「旅行記」、ジェームズ・ミルの「インド史」であった(ウィットフォード「東洋的専制主義」の邦訳448頁参照)。その結果、それまで明確な思想の持ち主でなかったマルクスはアジアに関する見解の持ち主として登場したといわれている。これは彼がリチャード・ジョーンズの用いたアジア的社会という呼び方から強い影響があったとみるべきであろう。彼は経済学本来の仕事とともにジャーナリズムに関係をもったため、現実的問題ととりくむ必要があった。とくにインドに関する深い関係をもっていたのである。このことについてマクレランはマルクスのインドに関する有名な言葉「イギリスはインドで二重の使命を果たさなければならない。一つの破壊の使命であり、他の一つは再生の使命である—古いアジア社会を滅ぼすことと、西洋の社会の物質的基礎をアジアにすえることである」を掲げていた。つまりイギリスの資本主義はインドにたいし、一面進歩的であるが、反面破壊的であることを明らかに示したものである(マクレラン「マルクス伝」ミネルヴァ書房版288頁参照)。最近小谷汪之氏の著述「マルクスとアジア的生産様式批判」(青木書店)はマルクスとアジア研究とくにインドの研究に関し克明な研究をしめしているというべきであろう。小谷氏によると、マルクスがアジア

に強い関心を示したのは、アジア的生産様式で問題になっている原始的共同体社会の解明とかわりあったようであった。

私も旧制中学校時代猪狩史山先生より、ロード・クライブ伝を英語の時間に教わったとき、とくにインドに強い興味をもっていたが、その後インドについての特別な研究はなかった。僅かに戦時中ブーグレ教授の「インド・カスト制度論」が邦訳されたから、このカスト制に関心をもって戦争に協力しなかった理由で廃刊においてやられた「社会学徒」に「インドカスト論」の小論を掲載した思い出もある。(「社会学徒」参照)

最近、「国際社会学叢書」(ジョン・レックス教授の編集)はその一冊としてラックナウ大学の社会学部の G. R. マダンのインドに関する著書「Western Sociologists on Indian Society」が出版された。これは、いわば19世紀から20世紀までの主要な社会学者によるインドに関する理論乃至は彼らの社会観念を纏めたものであった。とりあげられた社会学者として、一番最初にカール・マルクス(1818—1882)であった。ついでハーバート・スペンサー(1820—1903)、マックス・ウェーバー(1864—1920)、ヴィルフレッド・パレート(1848—1920)などを年代順にとりあげたものであった。社会学の分野で、こうした研究の著述は極めて異色のものというべきであろう。小谷汪之はその著「マルクスとアジア」のなかで、マルクスが展開したアジア的共同体に関する所説について詳細に論じていたが、マダンもこの「インド社会に関する西欧社会学者」のなかで同じように、マルクスのインドに関する見解のなかで、マルクスがインド社会の歴史的発展において演じた村落共同体の役割をとりあげたのであった。

マルクスによると、これらインドの共同体は小さな組立をしている、独立した共和政体であ

って、その世界観は、極めて狭隘かつ迷信的であり、しかし灌漑のことになると中央政府に依存し、国家的問題に関しては全く関知しないが、侵略者にたいしては反撃さえも加えないことをあげていた。しかるにイギリスの進出とともに家庭工業が破壊されたため、この自給自足の共同体は解体させられたというのである。しかもこの解体は、新しいコミュニケーション手段として社会的革命を招来したのであった。マルクスによると、このインドの村落共同体にたいし二つの理由があげられていた。その一つはインド民族は大きな公的事業については、すべて中央政府にまかせ、農業と商業のような生業はあらゆる領土内に拡がっている。こうした状況は遠い過去から発生し特殊な社会体系、いわゆる村落体制を形づくっているのであった。更にマルクスのインドの村落共同体に関する観察は詳細なものであった (*G. R. Madan, Western Sociologist on Indian Society, p. 11*)。マルクスがヨーロッパ以外の地域に眼をむけた時期は1850年代であった。とくに彼がヨーロッパ大陸からロンドンに亡命し、ここでイギリスの学者たちの研究書を読んで東洋諸国の事情を知って、ニューヨークの新聞に中国とインドの情報を書いた。このころのマルクスとエンゲルスの交換文書から、マルクスがフォスターのアラビアの歴史地理 (*C. Foster, A. Historical Geography of Arabia*) ペルニエの「旅行記」 (*Bernier's Voyages*)、ウィリアム・ジョーンズ卿の「東洋主義者」 (*Sir William Jones's The Orientalist*)、キャンベルの「現代インド論」 (1852) (*G. Campbell's Modern India*)、チャイルドの「東インドの交易報告」 (*J. Child's Treatise on the East India Trade, 1681*) フォン、ハンメル、J. ミル、トマス・ムーン、ポレクスフェン、ソルテイコフなどの諸書を読んで、中国やインドについて理解を深めたものであった。

マルクスはインドに関し、彼はロンドンに長期に亘って滞在してただけに、直接経験したことと、生きた資料が入手できただけに、しかも事物を観察する鋭い方法論的把握を有するだけに、正確なインドの認識に達したといえることができる。マルクスの東洋についての知識は、大いにインドばかりでなく更に中国に関しても相当な理解に達しにといえるべきであろう。

マルクスと中国について最も問題になっているのはいわゆる「アジア的生産様式論」である。

この問題については稿を更めてとりあげようと思っているが、此处では最近この問題が社会科学や歴史学の分野で極めて話題になっているので、このことに関連し少し触れておく。最近マルクスとアジア的生産様式論について示唆のある論文では、トム・ボットモア教授が編集した「カール・マルクス」 (*Karl Marx, 1979*) に掲載されているジョージ・リヒストハイムの論文であった。それによるとマルクスが、はじめて「アジア的、古代的、封建的、現代の資本主義的生産様式」という四つの段階をとりあげ、このなかに初めてアジア的生産様式を打ち出したのが、「経済学批判の序説」 (1859) を書いたときであった。しかし従来マルクスの「アジア的生産様式」についての、マルクス自身による評論がなかったため、この問題にたいし意外なほど甲論乙駁が生じていた。しかも、この問題が実践的に真剣にとりあげられた時期は中国に革命の波が高揚したときであった。とくに中国革命の戦略的戦術の問題が課題となったとき、このアジア的生産様式論にたいする正確な解釈を必要としたため、はげしい論争がくりひろげられたのであった。しかしこの問題は、端的にいうとソ連ではスターリン時代には全く無視され、全くかすんでしまった。極端にいうとこの「アジア的生産様式論」はマルクス主義の観念から

消えさってしまったのであった。

マルクスが「経済学批判の序説」にほりおこした「アジア制生産様式論」は幾多の変遷を重ねつつ浮沈の運命を辿ったが、ウィットフォークも戦後の労作「東洋の専制主义的」のなかで、この問題を更めてとりあげている。それだけにマルクスとウィットフォークの理論的つながりなどの問題になっているのである(注)。

(注) とくに社会学の分野でこの問題をとりあげているのは Anne M. Bailey と Josep R. Llobers の書いた「カール・ウィットフォークとアジアの生産様式論その再評価」(The Sociological Review Vol. 27 No. 3 August, 1979) など注目すべきものの一つである。マルクス主義者としてのウィットフォークはいろいろ批判を蒙っているが、仏蘭西、ニューレフトを代表するエルンスト・マンデルも次のようにウィットフォークを評価していた「ウィットフォークの最近の《大作》には明らかに科学的客観性が欠けている。とはいえ、マルクスとエンゲルスが「要綱」のなかで理解していたあの二重の意味で《アジアの生産様式》特有の性格を理解するため、最善の鍵となるのは、いぜんとして今日までのところ、彼の古い傑作、1931年に出版された『中国の経済と社会』であるように思われる(エルンスト・マンデル「カール・マルクス—経哲草稿から資本論へ」河出書房新社版168頁参照)

さきに一寸触れたようにスターリンが彼の論文「弁証法的唯物論と史的唯物論」のなかでマルクスのアジア的生産様式論を反論したので、少くともこの問題はソ連では終了したもののようであった。しかし1955年以後この問題を再度とりあげるようになったのはフランスの雑誌パンセであった。とくにこの問題についての貴重な文献は、われわれの先輩本田喜代治先生が編訳された「アジア的生産様式の問題」(昭和41年刊岩波書店)と羽仁協子訳のF. テーケイの「アジア的生産様式」(1971年刊未来社)が口火を切ったものといわれていた。其の後ブタベストのAkademiai Kiadoから発行された「アジア的生産様式論」(On the Asiatic Mode of Producti-

on)などがこれらの見解について一層教えてくれるものが多かった。しかも「パンセ」の論文を通じてこの問題に一層興味を抱かせてくれたのは、私が多年尊敬していた社会学者本田喜代治教授が、法政大学の社会学の授業でこの問題をとりあげたという事実は、社会学史を専攻している私には、またとない教訓を与えてくれたものというべきである。

1980年に私はウルメン教授による「ウィットフォークの記念論文」(Society and History Essays in Honor of Karl August Wittfogel)に刺激をうけ、フランクフルト研究所とウィットフォークについて研究をつづけたが、その際参考に供したものはメリアン・ソワー女史の「マルクス主義とアジア的生産論」であった。とくにソワー教授の本書からソ連の最近の状況について示唆をうけ、最近のアジア的生産様式に関するヴァルガの理論を知ったのであった。ヴァルガがその著「資本主義経済学の諸問題」のなかでアジア的生産様式論をとりあげていたことは1970年に発刊された小林良正教授の「アジア的生産様式研究」(大月書店)によって知っていたものの当時はこの問題に強い関心をもつことはなかったが、更めて Swaer 女史によってヴァルガの諸問題にとりくむことができたのであった。

戦前からヴァルガが中心になって発行した世界情勢に関する「四期年報」は、長い間親しみつづけたものであっただけにヴァルガにたいする親近感、彼の「資本主義経済学の諸問題」も容易に接することができた。とくに本書の終章ともいえる「アジア的生産様式について」は、ソ連では長期に亘って断罪され、忘れさせていた該問題を、復活させる充分な理論的展開を行ったというべきであろう。しかもこのアジア的生産様式に関する、従来のおびただしい混乱の主な原因が何処にあるかを端的に指摘し、彼れ

自身の明白な理論構成を示したというべきであろう。1964年以来、ソ連の学界にはこのアジアの生産様式論が復活したが、それとともに、貴重な文献が発行されてきたが、これに関しては福富正実氏の編訳された「アジア的生产様式論争の復活」(未来社)は世界史の基本法則の再検討という副題が示しているように、この問題に関連した主要な文献を読むことができるのは極めて有意義なものというべきであろう。

「アジア的生产様式論」にたいしては、社会科学例えば政治学や経済学乃至社会学などによっての研究が示されているが、戦後はこのアジア的生产様式論の重要な理論の構成分子として共同体が顕著であるため、歴史学の分野からの研究が目立っているのである。社会学専攻の私がこれらの問題を掘りさげているとき、この歴史学の分野に高まってきた研究成果を無視できなくなっているのである。しかし私の研究不足から、ごく僅かな文献しか挙げることができない。

昭和33年塩沢君夫氏の「古代専制国家の研究」(御茶の水書房)、昭和35年門脇禎二氏の「日本古代共同体の研究」(東京大学出版会)、昭和40年中村吉治記念論集「共同体の史的考察」(日本評論社)、昭和43年吉田晶氏の「日本古代社会構成史論」(塙書房)、昭和47年芝原拓自氏の「所有と生産様式の歴史理論」(青木書店)、昭和49年林直道氏の「史的唯物論と所有理論」(大月書店)、昭和51年熊野聰氏の「共同体と国家の歴史理論」(青木書店)。これらは私の手もとにある文献の一部である。とくに塩沢君夫氏の著述の特色は、これまでマルクスの生産論の四段階説であるのにたいし、五段階という新説を説き、アジア的生产様式論の中に階級分化を明確に打ち出しているのである。この階級分化の問題を更に本格的に展開したものが、中村吉治博士の記念論集の冒頭に載せた「アジア的生产様式社会におけ

る階級分化」である。とくに「古代的生产様式に先行する最初の階級社会としての古代アジア的生产様式を指定し、日本の律令体制までの国家は古代の奴隷制の生産様式の社会ではなくて、アジア的生产様式を基礎とする古代アジアの専制国家であり、その崩壊のなかからはじめて古代奴隷的生产様式が展開してくる」(中村吉治記念論集5頁参照)という見解を大胆に示したものである。

今日より約半世紀も遡る昭和の初期、私は瀧川政次郎博士の日本法制史の講義に臨んで博士の奴隷問題に興味をもったことがあった。とくに奈良朝時代わが国にも奴隷が実際に存在していたことを実証的に証明してくれた瀧川博士の学説に心から敬服したものであった。この塩沢氏の新しい提案にたいし歴史学界ではどのような反応を示しているかは全く知らないが、しかしアジア的生产様式論に一石投じたものというべきであろう。これまで天皇制の研究に多くの労作をしめしていた門脇禎二氏による理論的展開は、アジア的生产様式論には共同体の問題が深くかかわっているだけに、日本古代共同体の研究は、かつて藤間生大、石母田正氏が論証していた古代共同体に更に新しい資料によってこれを論じたことは多くの寄与を加えさせたというべきであろう。吉田晶氏の「日本古代社会構成史論」も古代におけるわが国の家族と階級分化に関連した周到な研究というべきものであって、しかもアジア的生产様式論の現代的課題は、このアジア的生产様式にたいし歴史学の立場から科学的照明を与えたものでであろう。尚、熊野聰氏の「共同体と国家の歴史理論」はマルクス主義的歴史把握の発展として、わが国の共同体の国家にまで発展して経過を論じたものとして有益な論文である。

これまでアジア的生产様式論では、私有が欠如した段階として主張されていただけに、所有

問題の研究は極めて重要なことである。それだけに歴史学者が所有と生産様式の問題を扱ったとしても決して不思議ではないのである。芝原拓自氏の労作はまことに示唆の多いものの一つである。私もこのアジア生産様式の問題を研究しているとき、マルクスの書いた資本制生産に先行する諸形態をよみ、更にこの論文を一層理解するため E. T. ポブズボームの共同体の経済構造を読んで、多くの有益な示唆を得ることができた。そしてマルクスがロンドンに移ってから経済学の研究に多くの時間を割いていただけない、彼の経済学的知識が極めて完璧そのものであると断定されていた。それ故、彼が1858年11月12日付けでラッサールに送った手紙のなかで「15年間は生涯最良の成果の研究だった」といっているのは決して間違いではなかった。それだけに芝原拓自氏の著書の前資本制経済発展の論理的類型把握は、この方面に貴重な研究を与えたことというべきであろう。それだけに林直道氏の「史的唯物論と所有理論」(大月書店)、とくにマルクス主義と所有理論を読むと、アジアの生産様式論の追求は、その研究にあたって所有理論の体系的把握の不可欠であることを一層自覚させられたのである。

私はこのフランクフルト研究所の研究が最近の一つの研究課題となっているが、ウィットフォージェルと関連し、マルクスのアジアの生産様式にとりくむことの必要性を痛感しているが、こうした問題を研究しているとき、この問題が決してアジアという狭い地域だけのことでなく、世界史的認識を前提としなくてはならぬことの自覚をもっているが、そのために、マルクスとウエーバーの十分な理解をすすめているが、そのことによって世界史的認識をもつに至ったのである。この問題では太田秀通氏の「世界認識の思想と方法」(青木書店)が無視されぬ論文集であろう。

V 最近におけるフランクフルト学派の研究について

最近、社会学史家としての私の仕事はアメリカ社会学とドイツ社会学との関係の問題を調べることにあった。そのためドイツのフランクフルト学派に関する研究をとりあげている。わが国でもこの方面の研究が少しづつ見られているが、しかしそれが満足すべき成果として示されるのは今後のことであろう。

英米の学会でも、最近このフランクフルト学派に関する研究が盛況を帯びてきているのである。そのうち代表的なものはマーティン・ジェイの「弁証法的想像力」(the Dialectical Imagination)であった。この原書(382頁)は1975年に荒川幾男氏によって邦訳され、それと殆んど同時に本書の一部が青土社の雑誌「現代思想」(第5輯)に掲載されていた。

1970年代、私がもっとも感銘をうけた社会学の著述はH. ステュアート・ヒューズの「the Sea Change-Migration of Social Thoughts, 1930—1965」であった。ヒューズはこの著述以前に「意識と社会—ヨーロッパ社会思想の再建1800—1930」を書いてしたが、本書の邦訳のあとがきで、訳者は彼をもっともブリリアントな史家として称讃しているように、彼の研究は昭和40年代前後のわが国にも影響を与えたものであった。「the Sea Change」はヒューズにとって「意識と社会」の続編ともいうべきものであった。これはドイツのファシズムの暴力から逃れ、イギリスやアメリカに移動した優れたヨーロッパの知識人が沢山数えられるが、1930年代こそ西洋人が現代史に新しいものを賦与したことをとりあげたものであった。この著述でヒューズはフランクフルト学派の重鎮ホルクハイマーとアドルノを挙げ、この二人がアメリカの学界に与えた積極的な活動に触れていた。第4章「大衆

社会の批判」は、もっとも特筆すべきものであろう。

私もこのところはフランクフルト学派に関し研究ノートを作成しているが、小牧治氏の「アドルノとその周辺」と城塚登氏監修の J. シュライフンシュタインの「マルクス主義とフランクフルト学派」などから貴重な資料を与えられたが、ヒューズの著書からも多くの示唆をうることができた。

ヒューズの論文にもあるように、1960年代の後期アメリカの学界はヨーロッパの知識人の移動に関する研究が着手されていた。その移動の一つであるフランクフルト学派の研究も盛況をみせてきた。言葉を換えていうと、この亡命経験がアメリカに何を招来したかということが探究の対象となってきたのである。ジェイの「弁証法的想像力」もそうした研究の成果の一つである。このジェイの本書が出版された時期は1973年であった。それから数年経たず1977年にフィル・スレーターの「フランクフルト学派の起源とその意義」(Phil Slater, Origin and Significance of the Frankfurt School) もそうした雰囲気の中で出版されたものであった。

最近、私は「ドイツ社会学における実証主義者たちの論争」(the Postivist Dispute in German Sociology, 1976) を実証主義的研究の参考文献として利用しているが、これは1961年ドイツの科学的哲学的サークルに流行になっている論争にたいする重要な貢献をなしたものであった。この論争の直接的起源は、ドイツ社会学会によって1961年チュービンゲンで催された会合にもとづいたもので、それには Adorno, Abert, Dahrendorf, Habermas, Pilot, Paker などの見解が収録されているが、とくにオーギュスト・コントラの現代実証主義の前史を論じているハベルマスの仕事など印象的であった。

スレーターの「フランクフルト学派の起源と

その意義」を詳細に紹介することはできないが、全体を通じジェイの著書とは別な、しかも現代社会科学と対決している重要な問題を取扱っているという意味で、フランクフルト学派について組織的体系的知識を組立てようとする人々に貴重な文献となるであろう。

ジェイにしろスレーターにしろ、いづれもイギリスで出版されたものであったが、フランクフルト学派に属する人々は大概はアメリカに亡命したものであるが、彼等の学問的業績や学問的経歴に関しては当然アメリカで研究されるべきであるのに、フロムとかマルクーゼのような個人的研究には多くの研究が示されているにも拘らず、フランクフルト研究所の組織の研究は局部的なもののほか、これまで書かれなかった。しかるに1977年になって出版されたゾルタン・タールの「フランクフルト学派」はこの欠陥を補うに充分なものがあつた。

ジェイ、スレーター、タールのフランクフルト研究所の研究を通じて概観すると、この研究所は1922年2月3日に創立されたがそのころの場所は、極めて手狭なものであったが、新しく建てられたのは1924年の4月であった。この研究所から有名な出版物が出版されたが、それよりも1932年から1941年まで刊行された「社会研究誌」の荷っている学問的功績は、どんなに評価しても決して評価つくされるものでない。このことに関し1970年にこの研究誌の復刻版全9巻がケーゼル社から発行されたが、この巻頭に書いたアルフレート・シュミットの言葉「『社会研究誌』は今世紀におけるヨーロッパ精神の偉大なる記録文書の一つである。そこには知的独立と、批判的分析と、ヒューマニスティックな抵抗とが二度とは見られぬような形で統合されていた」(A. シュミット「フランクフルト学派」邦訳8頁)。

1960年代の後半、学生、労働者、知識人を中

心に左翼急進主義運動が、世界各地に盛んになったが、このころからフランクフルト学派がフットライトを浴びるようになった。勿論、現代におけるフランクフルト派の巨大な個性を正しく把握することも必要であるが、そのためにも正しい歴史的過去を尋ねるためにもジェイ、スレーター、タール等の著述を通じてフランクフルト学派の苦難にみちた全体像を捉えるべきであらう。

フランクフルト研究所に関する主なる参考文献

1. Martin Jay, *The Dialectical Imagination*
(ジェイ著荒川幾男訳「弁証法的想像力」みすず書房)
1. Phil Slater, *Origin and Significance of the Frankfurt School*, 1977
1. Zoltian Tar, *the Frankfurt School*, 1977
1. Edited by Andrew Arato & Eike Gebhardt, *The Essential Frankfurt School Reader*, 1978
1. Paul Connerton, *The Tragedy of Enlightenment: An Essay on the Frankfurt School*, 1980

(ばば あきお, 本学教授)